

安永武人先生を悼む

玉井敬之

一九八九年九月七日未明、安永武人先生が永眠された。この悲報はたちまち同志社大学の内外はもちろんのこと、先生の薫陶を受けられた人々、京都の文化、演劇運動に関係された人々に伝わった。

安永武人先生は同志社大学の国文学専攻の創立にかかわられて、日本近代文学研究の基礎を築かれただけでなく、長年にわたって京都の文化運動の中心的存在として多くの人々から敬愛されてきた。先生が逝かれたことは、一つの世界が、その中心を失ったということでもあった。

私事にわたることになるが、私が初めて先生の訶咳に接したのは、もう三十有余年も前のことになる。その頃の忘れ難い印象を記しておきたい。

昭和三十年前後の晩秋であったかと思う。当時、安永先生は、小野十三郎氏が校長をしておられた大阪文学学校にも幾度か出講されていた。私は何かの用事があって、先生と大阪文学学校でおちあう

約束をした。まだ大阪文学学校は独自の教室や設備を持っていなかった頃で、法円坂の大阪市教員会館の一部屋を借りて開講していた。日の短い夕方の、もう暗くなりかけた教員会館の廊下から、文学学校の教室にあてられた部屋に入ったとき、私はその肅然たる空気に圧倒された。すでに先生の講義は始まっていたのである。教室のなかの、年齢もさまざまな聴講生は、ただ一つの姿を追い求め、ただ一つの声を聞こうとしているのが、私にはただちに理解できた。

先生は田宮虎彦の『足摺岬』について講義をされていたが、時に発せられる質問に聴講生が示す反応も気持ち良かった。薄暗い電灯のもとで、緊張した時間が経過していったが、またそれは親密な雰囲気にも包まれた空間でもあった。何時の間にか、私もまた、ただ先生の声と姿のみを追っていたように思う。あたかも古びた写真がそうであるように、この時の情景は、今もなお、私の脳裏に懐かしく焼き付けられている。先生の名講義については、大学で受講した多

くの人々が語っている。私は大学の外の一教室で、偶然にもそれに遭遇する好運に恵まれたのだ。

安永武人先生のことを回想していくと、走馬灯の如く在りし日の先生のこと浮现でくる。

この文学学校のことと重なって、その頃、日本文学協会の京阪神三支部は、毎年秋に関西大会を開いていた。安永先生は、ある年の研究発表で、文学作品と読者との関係について報告された。『蟹工船』や『足摺岬』を読んだ読者がそれにどのように反応し、また感動したか、読書会や職場のサークルに直接に届かれ、精緻なアンケート調査をされたのである。これらの研究報告を会場で聞いていて、私は大きな衝撃を受けた。

これらは後に「大衆と文学」（『日本文学』昭和二八年五月）、「作品と読者」（『文学』昭和二八年一月）、「読者の問題」（『日本文学』昭和二九年二月）と矢継ぎ早に発表されることになる。この一連の研究では、作品はそれだけでは文学ではありえず、それを享受する読者の参加があって、はじめて文学として成立するということを、強く私に示唆してくれたのであった。そこでは読者が積極的に文学に関与することの意味が強調されていた。私のみならず文学の社会性に関心を抱いていた人々にとっては、これはきわめて新鮮な角度からの論究であった。読者論ともいべきこの視点は、安永先

生の近代文学研究の原点のような感じがする。

また一九五〇年代から六〇年代にかけて日本文学協会京都支部や大阪支部で榊原美文氏や猪野謙二氏らとともに文学と思想の問題や政治の問題について話しあったときがしばしばあったが、私の思い出すその頃の先生の姿は、いつでもジャンパーを着ておられるのだ。先生は晩年にいたるまで、特別のとき以外はネクタイをしめることをされなかったが、榊原氏や猪野氏らと談笑されている安永先生は、両氏と比べて若かったからか、私にはそのジャンパー姿が大変颯爽としたものとして映ったのである。おそらく安永先生のシュトルム・ウント・ドランクの時期ではなかったであろうか。私の眼前に浮かぶ安永先生はいつもその頃の姿と言葉で話しかけてこられるのである。それは私にとっても疾風怒濤の時代であった。この時期に私は安永先生と知りあったことを、人生の幸福の一つであったと思わざるをえないのだ。人と人との出会いということを、私は今頃になつて、ようやくわかりかけてきたような気がする。

一九八三年二月、安永武人先生は、『戦時下の作家と作品』（未來社）を上梓された。所収の御論文は「戦時下の文学」と題されて『同志社国文学』に掲載されていたものであり、多年にわたる資料の博搜と緻密な分析による研究がまとめられている。ここには一九五〇年代に関心を示された作品と読者との関係は論放の前面には出

てこない。しかし、読者としての安永武人その人の「よみ」が、「読む」という行為が問われようとしている。だからこの書物は、「かつてのわたしのよみ、あさ、を批判する結果にもなっている。

と同時に、あの戦争の体験に固執するあまり、あるいはふかよみにおちいつているかもしれない」（同書「あとがき」といわれる。一九五〇年代の先生の読者論が、量としての読者の存在に視点が定められていたといえるなら、後年の先生は、質としての読者の主体を追求しようとしていた、といっているだろう。それにもう一つは、「死と生とをわけたのは、まったくの偶然」でしかなかった」（同）という深い思いである。「戦時下の作家と作品」は、みずからの存立を問う、いわば自問の書物なのだ。それが、先生の晩節を全うするという志につながっていったのだろうと思う。人は一つの思想や信条で一貫して生きることは難しい。晩年になって、その生涯をふりかえるとき、一層その思いが強くなるのではないだろうか。

安永先生とはじめてお会いして以来、私が知った先生は、戦後日本の現実に対してその厳しい姿勢を崩されなかった。それは戦時下の体験を原点として常にそこに立ち戻り、そこから戦後を見つめる視点を決して失われなかったからであると思う。それが先生の固執されていた「人生」であった。

しかし、先生は晩年になるにつれて孤独のなかに沈潜されていか

れたようである。私は先生の姿に孤独の影が次第に濃くなりつつあることを認めざるをえなかった。その先生の姿は、たちまちにしてすべてのものを風化させる現代日本の状況に対する拒否を示していた。同時に、それに流されている人々への拒否でもあった。いうまでもなく、私も拒否された一人であったと思う。私はそのことを痛感していた。しかし、私をふくめて拒否された人々の多くは、先生の孤独と悲憤に親愛と共感を抱いていたのである。その親愛と共感が辛うじて現代日本への私たちの姿勢になっているはずである。それが先生の私たちへの遺産であったと思っている。安永武人先生はあまりにも早く逝かれた。

いま、切実に先生のことを思われるのである。